

## 企画展 「熱田空襲」—6月9日 愛知時計電機・愛知航空機への空襲

### 8分間で奪われた2000人のいのち 開催中～5月5日(日)

今年の名古屋空襲展は「熱田空襲」を取り上げています。「熱田空襲」とは、1945年6月9日愛知時計電機と愛知航空機をねらった米軍の空襲のことです。この空襲では、わずか8分という短時間で名古屋空襲最大の2000人を超える犠牲者が出ました。米軍はなぜ時計会社をねらったのか、この空襲で2000人を超える犠牲者がでたのはなぜか。日米の資料を使って疑問を解いていきます。

パネル展示「6月9日空襲とは何だったのか」、公開されている米軍資料(作戦任務報告書、損害評価報告書など)に加えて、戦争体験絵、2019年新たに制作した体験者の証言ビデオ、東邦高校美術科生徒の作品、慰霊碑などモニュメントのマップ、日本本土空襲で初めて使われた4000ポンド(2トン)爆弾の大きさを実感できる展示物など、「熱田空襲」を多角的に取り上げています。

3月9日のオープニングイベントでは展示解説①と東邦高校生徒会の「名古屋空襲慰霊の日」制定活動報告②、3月16日には東邦高校美術科生徒による作品ギャラリートーク③がありました。

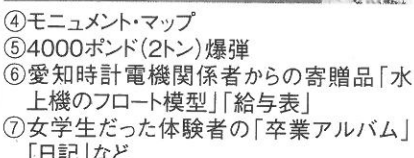
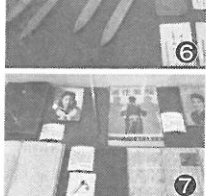
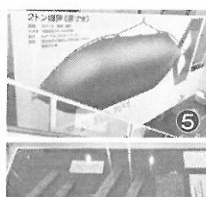
4月13日には、至学館大学助教 越智久美子氏の講演「中京高女の学徒動員と熱田空襲」があります。



「熱田空襲」の証言を受け止めて制作された東邦高校美術科生徒の作品



6月9日空襲直後に救助活動に当たった愛知県警察部警備隊員が描いた戦争体験絵

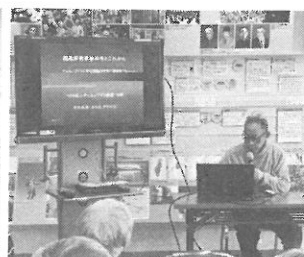


- ④モニュメント・マップ
- ⑤4000ポンド(2トン)爆弾
- ⑥愛知時計電機関係者からの寄贈品「水上機のフロート模型」「給与表」
- ⑦女学生だった体験者の「卒業アルバム」「日記」など

## 写真展 「福島を忘れない！ 被ばくから8年—チェルノブイリ原発事故から34年—」

開催中～5月5日(日) プチギャラリー

福島の写真家 飛田晋秀さんの写真展。チェルノブイリ原発事故を伝えるパネルとともに、福島の現状と被害を改めて見つめ直します。3月9日には、チェルノブイリ救援中部による講演会「チェルノブイリ原発事故周辺の現状報告」(戸村京子さん)、「福島原発事故から8年—現状は?」(河田昌東さん)を開催しました。



沖縄展「沖縄戦と子どもたち」 **予告**

5月21日(火)~7月6日(土)

先の戦争の沖縄戦から74年が過ぎました。沖縄の人たちが戦争に巻き込まれていった過去を学び、知り、考え、想像し、伝えることは今を生きる私たちの責務です。

今年の沖縄展は「子ども」に焦点を当て、対馬丸事件の悲劇や、鉄血勤皇隊やひめゆり学徒隊のように10代の若者たちが戦争に動員されていった実態、ガマ(地下壕)での暮らしや集団自決による子どもたちの悲惨な状況などを紹介します。



また、これまで詳細には取り上げてこなかった「護郷隊」や収容所での生活、戦争孤児についても展示をしたいと考えています。沖縄では沖縄戦の問題は決して終わっていません。米軍基地のある暮らしが続いているからです。

●6月1日(土) 13時30分~  
アニメ映画「白旗の少女 琉子」

●6月22日(土) 13時30分~  
講演と朗読のつどい  
講演：子どもたちの視た沖縄戦

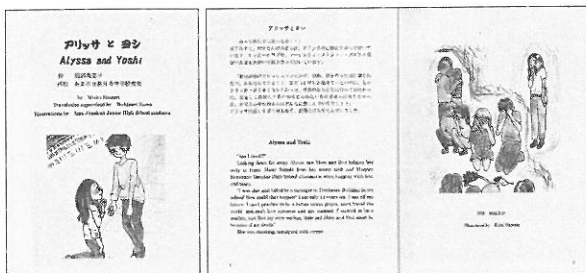
阪井芳貴(名古屋市立大学大学院教授)

朗読：沖縄慰霊の日・平和の詩「生きる」  
ピースあいち朗読の会 オリーブ

「絵本に託す銃なき世界ー服部夫妻の平和メッセージ」 **予告**

5月25日(土) 13時30分~15時30分 1階交流のひろば

1992年、服部剛丈さん(当時16歳)が留学中の米国ルイジアナ州で銃殺される事件が発生しました。以来、ご両親は米国社会に銃規制を訴えてきました。昨年2月に起こったフロリダ高校銃乱射事件は、銃規制強化を訴える米国高校生の運動につながっていきます。この事件に遭遇した高校生との交流を契機に、絵本『アリッサとヨシ』を刊行したご夫妻が絵本に込めたメッセージを、また絵本を被害者家族に届けた名古屋市立大学の学生が自身の体験を語ります。



ピースあいち特別展 **予告**

『水木しげるの戦争と新聞報道』

7月16日(火)~9月1日(日) 期間中は月曜のみ休館

協力:(株)水木プロダクション、日本新聞博物館



©水木プロダクション

漫画家水木しげるさんは太平洋戦争が始まると陸軍に召集されて南太平洋の激戦地ニューブリテン島に送られ、片腕を失いながらも九死に一生を得ました。今回は、水木さんが自らの戦争体験をもとに描いた漫画作品と、当時の新聞報道を展示します。

言論統制下の当時の新聞には「宣戦布告」「玉碎」などの勇ましい言葉が並んでいましたが、漫画では戦争が人をどれほど不条理に死に追い込むかが描かれています。戦地の最前線にいた一兵士の水木さんが目にした戦争を伝えます。

開館12周年 ピースまつり2019

5月5日(日) 11時~16時 無料開館 **予告**

出演は高校生のアコースティックギターと歌、筑前琵琶奏者による弾き語り「ひめゆりの塔」、オカリナ、朗読を予定しています。前庭に産直無農薬野菜やフェアトレード雑貨、沖縄の物産品、手づくり袋物・ガラス細工などのお店が並ぶ予定です。人気の搗きたて餅とカフェでひと休み。常設展ガイドも行います。無料開館の一日をお楽しみください。



昨年の様子

ピースあいち日曜開館「学生の日」 **予告**

6月30日(日) **学生無料!**

昨年11月に開催して好評だった日曜開館の第2弾、学生さん(中・高・大・専門生)のための無料開館デーです。お気軽にご来館ください!



## 時代を超えて語り継ぐモノたち—第6回寄贈品展 報告

2018年12月8日(土)~1月19日(土)

今回の展示はこの1年ほどの間に27人から寄贈された154点を展示しました。

初日の12月8日には6人の寄贈者が参加され、オープニング・セレモニーが行われました。

寄贈者の一人である岡田さんは、母親が熱田造兵廠に看護婦として勤めていた時の『身分証明書』と、父親が勤めていた会社に配られた英米両国に対する『開戦の詔勅』を寄贈されました。「高校教師として『詔勅』を戦争・平和学習に活用してきた」とも話されました。

小島さんは『引き揚げ手続き』関係書類と『軍隊手帳』を寄贈されました。「満州からの引揚げ時に、自分も中国人にさらわれる恐怖を味わった。大変な思いで帰

国したことを含め、当時の様子を理解していただくために寄贈した」と話されました。

青柳さんは戦時中の『貯蓄債権・壹円・拾円札』を寄贈されました。「亡き父は空襲にあったときも肌身離さず保管していたが、戦後はただの紙切れになった。負の遺産との思いで寄贈しました」と話されました。

今回の展示には、開拓団の方の悲痛な声が聞こえるような満州関係の紙資料が多くあり、また、第一次人民戦線事件の号外や1932年のロサンゼルスオリンピックを報じる新聞など、貴重な資料も展示されました。新聞やテレビで報道されたためか、多くの人たちの参観がありました。



### 来館者のアンケートから

- ・あの戦争の悲惨を語るのに当時の実物に代わる物はないと思います。たくさんの資料が整理され、展示されているのに感心しました。
- ・新聞その他出版物が国に統制され、ひいては国民が統制されていく過程を改めて知った。「自分で見たり聞いたりしたもの」を最も信用すべきだし、世論に流されない主体性を持っていたいと思う。
- ・今日が太平洋戦争開戦日ということを忘れていました。寄贈者の生の声を聞くことができ、展示物の重みがよく伝わってきました。今後もこのような企画が続きますよう、よろしくお願いします。

## 準常設展 戦争の中の子どもたち 報告

1月23日(水)~2月23日(土)

子ども展では、2種類の「イロハカルタ」を展示しました。一つは、子どもたちを戦争に協力させるために、日本少国民協会が1943年に作った「愛国イロハカルタ」、もう一つは、岐阜県美濃町に集団疎開した名古屋の露橋国民学校の子どもたちが、担任の先生と一緒に考えた手作りの「集団疎開記念生活いろはかるた」。

後者は2008年に、担任の先生が大切に保存されていたカルタを、教え子の富田照彦さん(84)が「ピースあいち」に寄贈されたものです。

富田さんたちは、戦争が終わってもすぐには帰れなかったのを待っている間、先生の提案でカルタを作ることになり、それぞれ自分のカルタ(文や絵はみな同じ)を作って持ち帰ったそうです。富田さんも大切に保存されていました。ひもじかった疎開生活の中でも、担任の先生のご配慮でいろいろ楽しい思い出もあったようです。二つのカルタを比べてみると面白いかもしれません。



### 来館者のアンケートから

- ・せんそうは人間いがいのどうぶつにもひがいがでることがわかりました。だからせんそうはあまりやらないほうがいいと思いました。
- ・語り手の人の話を聞いたり、展示物を見て、戦争のひささんがあらためてわかりました。人々の戦争で動物もまきこまれて殺されることも知りました。今の暮らしを当たり前と思わないことが大切だなと思った。
- ・戦争を勉強して、友達とかとふざけたりして「うざww」「死ね」などとふつうに言っていた。本当はそこまで思っていないのに。命の大切さを知り、「死ね」などは言わない。命は大切だ！



## 平和へのメッセージ

物事を理解する助けとして、しばしば統計が用いられる。たとえば戦争の規模は、亡くなった人の数で分かる。第二次世界大戦の世界の死者は6000万人、アジアでは2000万人、日本では310万人。この数字を見て、すごい戦争だったなあ、とあらためて思う。ただし、分かるのは数字だけ。戦争の生の姿は分からない。それを知るには、戦争を体験した人たちが書いたり話したりしている「生のメッセージ」に触れるのがいい。読めば「戦争はもうごめん」という人間の感情が伝わってくる。

### 憲法の樹

日本福祉大学保育科を卒業した私は、一九七三年に名古屋市立保育園に就職した。本山革新市政が誕生した年である。本山市長の初登庁の日には、市役所正面玄関に「憲法を市政のくらしのなかに生かす」の垂れ幕が掲げられた。名古屋市が教育、医療、福祉の政策の充実で全国に名を挙げたのはこの時期である。労働組合と保護者と一体となって勝ち取った保育士の増員により、過酷な労働条件は改善されて、健康に働き続けることができた。

園児の笑顔に、驚きの表情に、あるいは涙を拭いてあげて、抱きしめた児の温もりに心惹かれて、生まれた短歌がある。

### 池田美恵子

(平針九条の会・歌人)

テレビとは全然違ふと児らの指す百獣の王よ目覚めておくれ(東山動物園遠足)  
ママママと泣いた日もある園児らの太陽笑ふごとく翔びたつ(卒園式)

(第一歌集『美しい明日』より)

日本国憲法の下、70年を超えて短歌という表現の自由が護られてきた。憲法という大樹が心無い人達によって傷つけられることのないように、しっかり護っていく覚悟である。

永遠に平和を願ふ吾が前に  
「憲法の樹」はどっしりと立つ



### 元兵士の「陣中日誌」を読んで

私は1946年生まれなので、戦時体験はありません。憲法と一緒に生まれ、生きてきた人生ということになります。進駐軍や白川公園にあったアメリカ村などが、かすかな記憶として残っています。

一年ほど前、先輩のH氏から著書の寄贈を受けました。H氏の父君は1944年5月ニューギニア方面で戦死されましたが、10年ほど前、元オーストラリア兵士の親族から父君の「陣中日誌」の返却を受けたとのことでした。

父君は、戦地に兵隊や物資を運ぶ海上輸送部隊に所属されており、H氏の著書で紹介されている父君の日誌には、その頃徴用された船舶のほとんどが満足な護衛もなく次々と撃沈されていった様

### 山田幸彦

(元名古屋弁護士会会長)

子が書かれています。H氏は、父君の足跡をたどる中で、「徴用された民間船員の膨大な犠牲という大きなテーマが浮かび上がってきた」と書いています。

なぜ、このような悲惨で無謀な戦争を止めることができなかったのか。日本人はお上意識が強く、同調圧力が強い社会とも言われます。「付度」という言葉が流行し、為政者の強引な手法が目立つ今日、大勢に流されず、自分の頭で考え、発言すること、それを社会が尊重すること、そのような文化をこの国に定着させることの大切さを痛感しています。



## 思いをつなぐ～

戦争を体験された方の手記を朗読するグループに所属している。

時代とともに大切な記憶が埋もれてしまうことはとても心配だ。だからこそ実体験を綴る手記を読むということは、次世代に平和のたすきをつなぐ大事な役目だと思っている。

とは言え私たちも戦争を知らない。いろいろと資料を調べ、その時代を生きた方たちに精一杯寄り添い、その思いに沿って朗読しなくてはいけない。

切々と綴られた体験談は、胸のうちに封印したかった悲惨な記憶かもしれない。

その重みを感じないではいられないが、同時に

### 塩見郁子

(朗読グループ緑風の会)



これは過去の特別な日々ではないと気づく。なぜなら手記に描写されている人たちは、今暮らしている私たちと何ひとつ変わらない善良で真面目な人間で、一生懸命生きているということが伝わってくるからだ。どこかでひとつ足場が違っているだけなのである。

ではその足場の狂いは、唐突に踏み違えられたものか、それとも見逃し続けてきた「違和感」の積み重ねの結果なのか。残された手記を声にすることは、リアルな追体験を通して、私たちに今につながる課題を浮かび上がらせてくれる。

## 世界の平和を願う

私は昭和17年12月に大坂の天王寺区に生まれました。大阪府警剣道師範の父は終戦とともに、米軍の鹿児島上陸に備えて親子5人で鹿児島の実家に帰る事を決意し、以来私は日置市日置の実家で主に過ごしました。

五才の時、実家のすぐ前の道路を進駐軍がトラックでパレード、大勢の村民となぜか上半身裸の私と私の甥も見学しましたが、トラックの一人が裸の私達を指さして何か叫びましたが何と言ったか。母方の実家は鹿児島市薬師町で幸い戦火は免れましたが、市内の大方は空襲にあいガレキの山

### 重岡 昂

(名鉄友愛会会長)



を見ながら銭湯に行った記憶があります。戦争のツメ跡を見た一人です。この戦争で多大の同胞の犠牲、沖縄の悲劇がありました。

今でも赦せない事があります。それは広島・長崎への原爆の投下です。当事国の大統領にノーベル平和賞を推薦する為政者にはあきれ果てるばかりです。かつて「いつからか神にたのまず老いの春」と詠みましたが、元旦恒例の猿投神社のお参りで欠かせない事がひとつあります。それは世界の平和です。

## 晴着を咎める時代があった

昭和十九年、国民学校三年生の春休み。出征の前に、結婚式を挙げる従兄のお祝いに、雄蝶雌蝶\*を務めるため、袂の長い着物を着て出かけた時のことでした。いきなり、男の人がずかずかとやって来て「この非国民!!」と、私の足を大きな靴で踏みにじりました。

驚くやら恐ろしいやら痛いやら、わっと泣き出した私を尻目に、母が何か訳を言いながら詫言っています。何故文句の一つも言ってくれないのかと、それも悔しくていつまでも涙が止まりませんでした。

「贅沢は敵だ」という時代でした。でも口で叱るのならまだしも、子どもに乱暴をして、あのおじさんは兵隊さんになれないから、あんなことで

### 松ヶ崎敬子

(元アナウンサー)



手柄を立てたつもりでいると、恨めしく思いました。人としてためらうような事でも国策に沿う事なら率先してやるのが国民の義務だと洗脳されて、乱暴も平気、それを良しとしなければ弾劾されたのです。

疎開のこと、空襲で家が焼かれたこと、嫌な思い出ばかりの中でも、このことはいつまでも消えず、いまだに泥に汚れた白足袋を、泣きながら脱いでいる夢を見ます。

あれから七十五年。子どもたちにあのようなすくわれない思いをさせたくないものと思います。

(\*幼い子が三々九度の酌をする役)

## 2018(平成30)年度「戦争体験語り手の会」の活動 報告

「ピースあいち」は2007年5月に開館しましたが、語り手の会はその2年後の2009年7月に発足しました。以来、充実した活動を行ってきましたが、本年度も以下の四つの柱の事業を実施しました。

### 1) 平和学習支援事業

戦争に関する資料館運営協議会(愛知県・名古屋市が設置)から受託して、愛知県下の小中学校を巡る事業で、本年度は名古屋市内2校(小学校1校、トワイライトスクール1校)、名古屋市以外の愛知県下の小学校6校、中学校2校、合計10校で実施し、1020人の児童・生徒らが聞いてくれました。

### 2) 夏の戦争体験を語るシリーズ

本年は8月1日から15日までの間に12回開催し、聴衆は568人でした。

### 3) 「愛知・名古屋戦争に関する資料館」夏休み特別企画事業

8月1日から19日までの間に8回開催し、聴衆は192人でした。

### 4) その他の語り活動

上記のほか、愛知県下の小中学校や各種団体からの要請に応じて語り手を派遣したり、「ピースあいち」を訪れた学校・団体に対しても語り事業を行うとともに館内ガイド事業も行いました。

結果、戦争体験者の語り事業は延べ77回、聴衆は総勢5400人を超えました。

体験者のお話を聞いて

①子どもたちは、僕たちと同じ年の子どもたちが空襲のなか逃げまどったり、家族と別れて田舎に疎開し、食べるものもない生活をしていたなんて今では考えられない。戦争の悲惨さや悲しさがよくわかった。つらい体験を話してくれてありがとう。

②担当の先生方からは、現場は戦争体験のない教師ばかり。学校教育の中で平和教育をどうしていくのか悩んでいます。私たちも初めて聞くようなお話で、勉強になります。

と感想を寄せていただきました。

「語り手の高齢化と戦争を知らない世代の増加」という中で、語り手のお話を補完する映像作成や、語り継ぎ手の活用など今後の課題を実感した年でもありました。

今年度は「語り手の会」事務局に入ってくれるボランティアを募りました。結果、運営委員を含めて7人が新しくメンバーに加わり、語り手のサポートを強化する体制ができました。



## 「ボランティア全体会」と「名古屋空襲追悼の夕べ」 報告

3月16日(土)

早春の土曜日の午後、ボランティア全体会が開催されました。現在ボランティアは総勢103人(平均年齢67.4歳)。そのうち70歳以上は60%を超えています。最近では現役で仕事をしている若い層のボランティアが積極的に活動に参加しています。互いの人権を尊重する対等な人間関係が保たれ、一人ひとりが人生経験や技術を活かした持ち味を遺憾なく発揮して様々な活動に取り組み、抜群のチームワークで事を成していくのは、「ピースあいち」の大きな特徴といってよいでしょう。このようなボランティア集団であるからこそ、「戦争と平和のための資料館」を10年以上も維持し続けることができたのだと思います。最後に、全員が参加した一日限りの合唱

団の歌声がホールに響きわたり、閉会しました。

続いて「名古屋空襲犠牲者追悼の夕べ」に移りました。第一部は、緑風の会の朗読と、南山国際中学校生徒による歌。どちらも毎年、心打たれるものがあります。第二部は、ボランティア手作りのともし火が平和地蔵前に並び、建昌寺と瑞光院のご住職による法要が行われました。



ボランティア全体会



ともし火法要

シリーズ

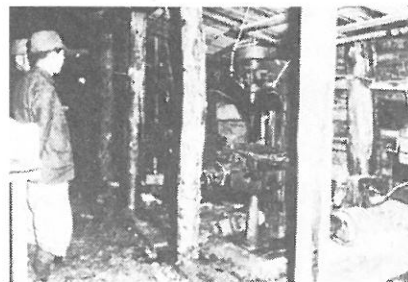
平和を守る仲間たち⑤

瀬戸地下軍需工場跡を保存する会

1984年瀬戸市北部の水野という地域で歴史のかたに埋まれそうになっていたトンネル工場の入口が再発見されました。発見したのは地元の中学生と社会科の先生。調べていくうちに、それが戦争の時代、名古屋で海軍の飛行機を作っていた「愛知航空機」という会社の疎開工場跡だったということがわかりました。そしてこの跡地を「平和を伝える貴重な遺産」として保存し整備しようという趣旨で1990年1月に「瀬戸地下軍需工場跡を保存する会」が発足しました。

会の活動としては①証言・資料の調査・記録する活動②市民・県民に向けた広報活動③他団体との交流④跡地保存・整備⑤瀬戸市及び諸機関に対する要請を行ってきました。①の調査・記録活動では、関係者の方々の証言記録だけでなく国会図書館にあった米軍資料の解析や地元に残る町内会の記録調査などを行い「証言資料集」を4度にわたり発行しました。②の広報活動では、夏に行われる「ピースフェスティバルinせと」や「あいち

平和のための戦争展」にも毎年参加しています。また会報を年5・6回発行し、会員(約150名)他に発送しています。春には日帰りで周れる東海地方の戦跡見学会を行っています。今年も5月に豊田市の戦跡見学会を計画しています。インターネットで「瀬戸地下」と検索して頂くと、会のHPやフェイスブックのページが出るので見てください。(事務局 寺脇正治)



2005年に5か所の入口はすべて柵で封鎖されました。

ボランティアの窓

同行二人の思い

「ピースあいち」を初めて訪れたのは約十年前になる。何も知らない私が友に誘われてのことである。戦後生まれでボーッと過ごしていた私にも心に止まる出来事に出会う。

朝鮮戦争(これは頭上を飛び交う数多の飛行機への恐怖)、と第五福竜丸の惨禍である。このことが心にとまったのは、今思えば、同居していた祖母の死生観を感じてのことと思われるが。

その後、父との死別。またこの様な世の負の部分への視点に誘ってくれたかけがえのない友を病で失う。友の心に添いながら「同行二人」の思いで何かできることはないかと、永い悲嘆と逡巡を経て、この「ボランティア募集」に辿り着く。参加後すぐ、ここは私にとって真に学びの場であると痛感する。自分勝手な諸々の都合を受け入れて下さった御心遣いを無にしないように念じている。



峯澤 叶美

空襲と今

まさか40年間も住み慣れた地域が「日本空襲」の中心地だとは知りませんでした。住居地は千種区上野、北の平坦地(ナゴヤドーム)からは南の一段高い台地、上野村です。戦前は畑地と水田、東の東部丘陵に囲まれる狭い村地でした。戦時体制下、北の下段の水田に三菱航空機、西に陸軍補給廠や造兵廠がつくられ、村は丘陵地と軍需施設に囲まれていました。1944年12月、三菱の初空襲、上野からは約400m離れた工場に着弾、1~3秒後には爆発音が響き渡ります。

終戦直後、今のJR大曾根駅から上野を見ると二階家が一つ見えただけでした。名古屋空襲は東京に次ぐ規模、軍需施設直近の上野村は「最大最多」の戦場だったでしょう。空襲体験者は、悲惨ではなく「恐怖」と表現されます。時々「ピースあいち」館内のガイドをします。その時はこの言葉の重みと上野村を考えながらすすめます。



桐山 五郎



資料館探訪 23

杉原千畝<sup>ちうね</sup>広場—センポ・スギハラ・メモリアル

この施設はリアニアで、「命のビザ」を発行し、ユダヤ人を救った杉原千畝の功績を称えるために、愛知県が整備したもので、杉原の母校旧制五中(現瑞陵高校)の正門の西側の屋外に作られた。2018年10月13日に一般公開された。

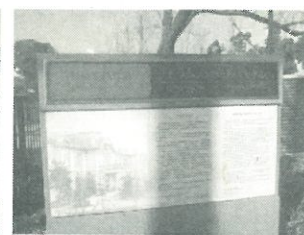
A決断と希望、B運命のビザ、C杉原千畝の生涯、D歴史と継承の4つのゾーンに分かれパネルで説明されている。Aゾーンは正面にあり一番広い。壁面の前に杉原がユダヤ人親子3人にビザを渡すブロンズ像がある。トランクがユダヤ人の傍に置かれているのがリアルである。ビザは陶板に刻まれている。実際に難を逃れた8人のユダヤ人の写真が展示されている。「一つの命を救うことは人類を救うことである」。タルムードの言葉とともに、助かっ



た人マーク・サロンの「命の贈り物」の言葉が心に残る。説明は日本語と英語で書かれている。

名古屋市は杉原千畝の功績を称えて、千畝が住んでいた中区平和町から瑞陵高校までの通学路を『杉原千畝人道の道』と名付けて、通学路を歩けるようにしている。その説明板が市民会館の前の歩道に取り付けてある。

(N)



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

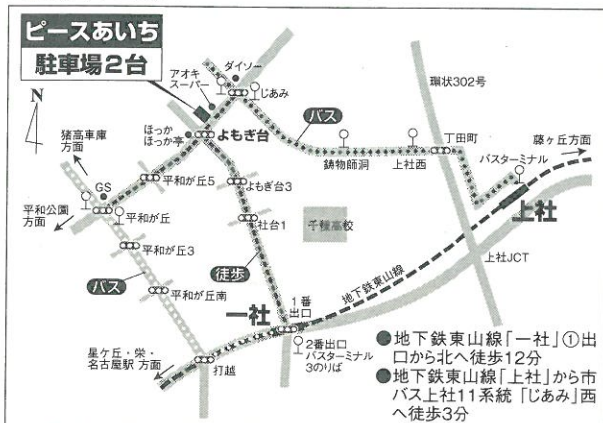
ぜひ「ピースあいち」の会員に!

開館12年目に入り、戦争と平和の資料館として社会的にも、ますます期待されつつあります。現在は「熱田空襲展-8分間で奪われた2000人のいのち」が開催中で、5月から始まる沖縄展「沖縄戦と子どもたち」、夏の特別企画「水木しげるの戦争と新聞報道」展の準備をすすめています。

「ピースあいち」の基本財源は、入館料(大人300円・子ども100円)と会員の皆さんの年会費(正会員6000円・賛助会員3000円)です。来館者数は、開館した2007年は約12,000人、以後は6,000人前後で推移してきました。

現在会員数は911名(正会員381名・賛助会員530名)ですが、「ピースあいち」の年間経費約1,100万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼っているのが現状です。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

交通のご案内



【利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・夏季・冬季休館
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下の暮らし」「現代の戦争と平和」、準常設展示「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」。ほかに、図書や戦争体験DVDのライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

●編集後記●

「ピースあいち」には、およそ100人のボランティアがいる。このうちの18人が「ピースあいち」の運営委員会(運営に関する決定機関)の委員を務めている。ボランティアは毎日4、5人が当番として詰めている。入口受付で入館料をいただいたり、2、3階にいて来館者の問いに答えたりしている。

ボランティアのメンバーの人材は豊富で多士済々。毎年の特展や企画展のアイデアは、全てボランティアから寄せられている。常駐者は庭山輝男事務局次長のみ。当館の運営は、ボランティアの方々が支えている。

(S)